

降誕節特別集会（清瀬国立東京療養所にて）

独子の栄光

――ヨハネ伝第1章1～18節――

1957年12月15日

小池辰雄

□□ス 太初に言あり 在らしめて在る者 原始に靈言があつた 光 体受すること 受肉
恩寵の十字架 真の平和 神の栄光体

【ヨハネ1・1～18】

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2 この言は太初に神とともにあり、3 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。5 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。6 神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。7 この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。8 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。13 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我がかつていえるは此の人なり』16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

●□□ス

ここはなかなかむずかしいところですが、私たちはこれをいわゆる神学的にむずかしいと思つてはいけません。



ルカ福音書は非常に劇的でありました。ヨハネ福音書もちろん劇的ですが、深淵のようなところでありまして、皆さんと共に今日この原始福音という森の中に深く、あるいは霊界の中に高くとり入れられるといった角度で接して行きたいと思う。しかもそれはきわめて何でもない我々の普通の現実においてこのことがなされるのです。

●太初に言あり

なんという素晴らし宣言なのでしょう。ヨハネ福音書はもちろんギリシア語で書いてあるけれども、この「ロゴス」という語はギリシア哲学における概念ではすでないのでして、ヘブライ語の「ダーバル」にあたる語で、実存的な性格を深くもっている。ギリシア的な概念でロゴスというと、これは秩序、理性というような角度の言でして、非常に知的な角度の強い言語です。ところが、聖書は神のダーバル（言）であつて（テモテ後書3・16）、霊言的な性格を持っている。「ダーバル」というこのヘブライ語はそのように実存的な語です。

●在らしめて在る者

モーセは神さまに出つくわしました。神さまは、

「我は有りて在るものなり」（出エジプト3・14）

と言われた。このヘブライ語において「在る」、ドイツ語の「Sein（ザイン）」これは決して静的な「在る」ではない。「在る」ということは、なるほど静的な面ももっているが、その中に「動的」な面ももっている。私は静かにこうして立っている。けれども、私の中では肺は呼吸している。血はグルグルめぐっている。一刻も休んではいけない。停滞していない。皆さんは、こうやって坐っている。この「在る」ということは、生命が動的に動いている。だから、「在る」ということは同時に「生きて在る」ということです。生きて在るということとは、それは同時に「動的」な存在であるのです。ヘブライ人はその意味において、生命動的な「動在」——「動在」なんていう言葉はないでしょうが、自然にそんなことになつてしまった——静中の動、動中の静なんていうが、そういった意味において「ロゴス」という言葉は非常に動的な性格をもっているのです。

「神、光あれと言ひ給いければ光ありき」（創世記1・3）

また、詩篇の33篇にも、

「もろもろの天はエホバのみ言によりて成り、天の万軍はエホバの口の靈氣に

よりて造られたり」（詩篇33・6）

とある。神の言は必ず靈氣を持っている。そして動的であるところの神から発しているものは、同時に力を持っている。

神が「在る」とは同時に人間を



「在らしめている」

ことです。私は神さまの、

「我は在りて在るものなり」

を、

「我は在りて在らしめるもの」

または、

「在らしめて在るもの」

と訳したい。私は太陽の在り方を瞑想しながらこのことに思いあたり、文法的にも無理ではないことを知って大胆にこう主張したわけです。そして最近、向こうの学者たちがそれに気がつき始めているのでうれしく思っています。

ゲーテが『ファウスト』の中で、ヨハネ1：1の、

「初めに言があつた」

を初め、

「思念（Sinn Zeyn）があつた」

それから、

「力（Kraftクラフト）があつた」

そして最後に、

「行為（Tatタート）があつた」

と、ファウストをして言わしめているが、

「初めに行為があつた」

と言ったことは、やはりゲーテがヘブライ語の研究を充分深くやった人だからです。ヘブライ語の性格からいっても、人間の在り方からいっても、ゲーテはそこをつかんだのだと思われます。

●原始に靈言があつた

そこで皆さんは、「初めに言あり」というこの「言」ですが、私たちの感覚でもって言葉と考えたらこれはダメであります。初めにあつたのは人間の言葉ではなく、神さまの言です。

「太初に言あり、言は神と偕にあり、

というこの言は、即ち靈言であつて、

「初めに靈言（Logos）」

と明治初年の人が訳しているが、私がちょうど「靈言」と書いていたころ、それを発見してうれしく思いました。しかもそれは神の言ですから実力をもった言でした。

言は神と偕にあり、言は神なりき。

というのですから、神と共在している。それは人格的な存在なんです。しかもその言は神



であった。神と同質の言であった。これは端的にいうならば、もちろんキリストです。キリストのことをヨハネはまず「言」といつて表現した。ギリシア哲学の概念よりはるかに深いヘブライ的なところに入っているのです。

²この言は太初に神とともにあり、
そのようなある人格的な——あるいは霊格的といってもいい——そういった存在が本質的に神と同質であるところのものです。

³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

というのですから、全く別格な存在です。いわゆる被造物ではない。特別な存在です。神的にして一切を創造したものです。

⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。⁵光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

生命あるいは生命の光であったが、暗黒の世はこれを理解しなかった。暗黒は光に照破されてはじめてこの光がわかる。即ち、「光を悟る」とは、光に負けてこれを受け入れることです。

⁶神より遣された人いであり、その名をヨハネという。⁷この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。⁸彼は光にあらず、光に就きて証せん為に來れるなり。

この光の証人は太陽の道しるべの暁の明星のような洗礼者ヨハネです。

● 光

⁹もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。¹⁰彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。

「世」というのは、もちろんこの罪の世のことをいう。私たちが見ている光は、これはすべて太陽の光です。太陽の光によつてものを認識している。私たちの経験の世界において太陽がなかったならば、何もわからない。

今、「光は何であるか」と物理学の方では非常に詳しいところまで突きとめているようですが、しかし、霊の世界、深い瞑想、祈りの世界では全く別な、何ともいえない光に出つくわすことがあります。これはキリスト教に限らない。仏教の世界においても光というのは大事な要素です。光のない宗教なんていうものは正しい角度の宗教ではないでしょう。

旧約聖書においても光という現象は諸所方々に書いてある。モーセのところでもそうです。霊の火が燃えている。しかも、その火が消えない。これも一種の光であります。エリヤももちろん、エゼキエル、イザヤもそうです。詩篇の中にはこの光という語がたくさん出てくる。預言者たちは、みなそういった霊的な現象の光を一つの徴として受けている。



ところが、ここに全く別な、驚くべき霊的な光が現れてきたのです。

「真の光ありて、世にきたれり」

と。「真の」とは「神の」であるからです。

11 かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。

これは、私たち生まれつきのままなる人はこれを受けとることができないという。「信じる」ということは、とかく観念的になりやすいから、「受けとる」と言いたい。ここのもっとは正にそう書いてある。

せっかくボール投げたのに、これを「オーライ」(all right) といって受けとらない。そっぽを向いているから、他の方へ飛んでいつてしまった。光は実は非常におのが身にふりそそいでいるのに、これを浴びようとしませんのです。

● 体受すること

13 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。

「私のお父さんは、また私たちの先祖は光を受けとったから、私も当然受けとれます」

とはいかないのです。ユダヤには素晴らし先輩が大勢いたにもかかわらず、この光を受けとりそこなってしまった。だから、血肉によらない。イスラエル人であるからというわけで、これを受けとるわけにいかない。

逆にこれを十字架にかけてしまった。どんな御利益を、どんな幸福を願って、それを受けとろうと思っても、そういうわけにはいかない。御利益主義や幸福主義やまたそれから血肉ということ、いわゆる人間の宗教性というようなわけで、これを受けとるわけにはいかない。

「ただ神によりて生まれしなり」

という人だけが本当にこれを受けとることができる。

聖書がむずかしいというのは、理屈がむずかしいのではない。あんまり十字架がむずかしくなるからむずかしいのです。だからキリストは、

「幼児のごとくならなければ、私を受けとるわけにはいかない」

と、仰った。

今の文化人はあまりにロゴスの、理性的です。知は非常に発達したが、大事な生命が受けられない。ごちそうが出て、それを喜んで食べようとしなくて、熱心に観察、研究分析ばかりしているので、そのうちに腐ってしまう。これを頭で受けとるのではないですよ。また、単に心で受けとるでもない。体をもつて受けとる。魂をもつて、全存在をもつ



て受けとる受け方が、その光を受けとる受け方なんです。

私たちは太陽の光を体の一部分でなく、全身をもって浴びる。空気は指の先で吸っているのではない。全身および鼻から吸って肺に受けとると同時に、全身の血がぎよまるといふのが、これが受けとり方です。私たちは空気を吸って全身がきよめられる。そのように、最も大事な生命の生命であり、光の光であるところの事態だけは受けとることをしないで、一生懸命に思案をしている。分析、研究をしているのです。実におかしなことですね。

12月になって、町ではクリスマスツリーを飾って騒いでいるが、キリストを受けとったかという、そういうわけにはいかない。私たちは一人ひとりが、一本一本のキャンドルにならなければ。ローソクになって、聖霊の光をとすものとなるなら、キャンドル・サービスを真に楽しむことができます。

●受肉

14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に

父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

この一句であります。この一句が身に本当に化体し、血となり肉とするために、今ここでクリスマスを迎えている。よく祈りながら、瞑想しながら聞いていてくださいよ。

「言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり」

とは何と驚いた言でしょうか。聖書に書いてあるものだから、私たちは何とも思わないで読んでいます。なんと現代人の理性と判断を打ち破る言なんですか。だから、はじめから言うとおりの、

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」

と言っているこの「ダーバル」（言）という「ロゴス」に神の世界の奥義が隠されているのです。どうか、近代的な理性的な判断というやつを乗りこえて、本当に深い神の秩序の世界に、神の摂理の世界に、皆さん一人ひとりが入ってください。

「手をのばせ」

と言えば、手がのびた（マルコ3・5）。足なえに、

「立つて歩め」

といえど立つた（マルコ2・11）。

「ラザロよ、出できたれ」

と言えば、死人が復活して出てきた（ヨハネ11・43）。魂にキリストの言が語られれば、その魂をゆり動かすような言葉であった。私たちの全存在に、その根底に働きかけてくるところのものが、これが福音です。福音とは単なる「教え」ではありません。福音はこの力ある事態です。

なぜ今のクリスチャンは力を持たないか。死んでも死なない生命をなぜもたないか。こ



れはこの神の言をいい加減に受けとっているからです。創世記から黙示録まで、神の言をいい加減にしているから。これを頭で読み、目で読み、判断しているからです。この福音の世界は、

「わかるの、わからないの」

と言っている、そんな呑気な世界ではない。そんな世界はいわゆる一般の聖書の研究という事態なんです。私は研究は悪いとは言わない。けれども、これが大きな躓きとなっている。なぜ端的に、神の言は実言であるから、この神の言に全身をもって、

「然り、はい」

と言えないか。神さまの前に本当に平伏さないか。そうしたならば、神は人を倒しっぱなしにはなさらない。必ず起こしてくださる。驚くべき生命を与え、力を与える「言」なんです。

「神、光あれと言いたまえば光ありき」（創世記1・3）

というこの神の言を、皆さん、瞑想してごらん下さい。この事態が本当に受けとられているか。

「幸いなるかな、霊の貧しきもの、天国はその人のものなり」（マタイ5・3）

と、キリストに言われたときに、本当に自分が霊の貧しい者か。本当に天国がその人になっているか。ひとつぶつかってみてください。ぶつかってみて、誰か神の言に耐え得んやという。キリストの言葉は激しいですよ。しかし、それは本当の生命を与えるための激しさなんです。キリストの言葉はそういった実力があります。

「耳しいは聞こえ、足なえは立ち、らい病人はきよめられる。死人はよみがえ

らせられ、魂の貧しき者は福音を聞かせられる。おおよそ我に躓かざる者は

幸いなり」（ルカ7・23）

というこの驚くべきキリストに、今のキリスト教界はややもすると、躓いている。聖書の事態に水を割っているのです。聖書の事態はまだまだ呻き叫んでいるのに、これに水を割っている。だから、本当に聖書がじかじかに読めてこない。水を割らずにそのままぶつ倒れてごらん下さい。そうしたならば、聖書の言葉は私たちを活かす言葉であるということがわかる。言中の言、即ち、神の言はそのようにイスラエルに向かってその歴史の中に言即行として食い込んできた。言即行として神の言は展開してきたのです。

イスラエルはその前に惨憺たる在り方をした。この神の言と取り組んだ一人の預言者にエレミヤという預言者がいる。エレミヤの魂の中に入ってきたから、エホバを通して発動する。そうすると人より言い逆らい受ける（エレミヤ20・9）。

「もう言うまいと思っても、これは火が燃えるようであつてどうにもならない」

という。これが本当に神の言を受けとっている姿なのです。

「神の言はどういう概念だ」



なんて、エレミヤは言っているのではないですよ。神さまの言を全存在をもつて実存をもつて端的に受けとつて、そして彼は神の言の証者となった。そして、私たちに正に根源の言として根源語として臨んできた。

神の表現体そのものなる方は、即ちこのイエス・キリストという人であります。

「言は肉体となりて我らの中に宿り給えり」

というのは、神は私たちに救いの道を開くために、旧約的な角度からの言だけではどうにもならないので、最終に神さまはいよいよ自分の言である「ロゴス」としてのキリストをととう「サルクス」として肉体に化体してきたのです。この「宿る」という字は「幕屋を張る」という字です。幕屋を張るというのは、イスラエルの民が荒野の中を40年間においていつもモーセに率いられて幕屋を張り、またこれを畳んでは進んで行つた。ヤハウエー（実存主）なる神と出会つた「出会いの幕屋」でした。

●恩寵の十字架

イエスはいかに私たちと同じ弱さであるか。私たちとなんの変わりもない普通の凡人として現れたか。否、普通人どころではない。実にみすばらしい一番どんだ底の姿で現れてきた。イエスは神の子なのですが、神の子と告白したのは、マルコ伝にも書いてありますが、一番初めに悪鬼が言つた。だから、イエスは、

「我を言いあらわすな」

と言つておられる。そのように光が全く光でないような姿で現れたのです。だから、これを人は見損なつた。これは逆説的なあらわれです。

「言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり」

と。どうしてキリストはそんな現れ方をしなければならないのか。イエスは私たちの罪、私たちのなやみ、私たちの肉体の欠陥を、身親しく知る人であります。身をもつてこれを共感し、同じ現実を背負つてくださった。これがキリストが肉をとつたゆえんです。

私たちはお互いに同情はします。しかし、他人に対する同情はある限度までで、その先はゆけない。けれども、キリストにおいては、その人の痛み、その人のさびしさ、その人のけがれ、それよりもはるかに奥の世界を見、感ずるのです。

ラジウムの放射能にはガンマー線なんていう凄いものがあるそうです。キリストというエックス線はガンマー線よりもすごい放射能です。キリストはその放射能をもつて、私たちと同じ弱さを持ちながら、すべてを浸透して行く。しかも、これは驚くべき愛の生命を与えるところの愛の放射能です。この愛の放射能を宿しているのがキリスト者であり、それが愛の幕屋を張るのです。ところが、これを多くの人は受けそこなつてしまつている。世はこれを受けない。いや、弟子たちですら、ついにこれを受けそこなつてしまつた。

神さまは真実です。



「それなら、本当に受けさせてやるぞ」

と、それで神が最終の手段をとったのが十字架です。イエスはいきなり天界に入ることゝゆるされずして、神の御意を受けとって、十字架にかかり給いました。

「旧約宗教の預言しているところの預言をおまえはここで十字架をもつて成就せよ」

と。これがゲッセマネの祈りで、キリストが受けられた事態です。贖罪です。贖罪の十字架です。血肉はどうにもならない。このどうにもならない血肉の私たちを、血肉からの断絶と転換と変質をさせるために、キリストは十字架にかかりたもうた。深く十字架を瞑想しなければダメです。皆さん、このまま、あるがまま、キリストの十字架によって私たちはこの血肉から断絶、転換、変質せしめられてある。

「汝は既に旧き血肉の己に死ねるものなり」

と、キリストは十字架という事実の言でもつて私たちに語ってくださっているのです。

十字架を信じるとは、真に十字架をこのようにして受けとることです。キリストの十字架を100%受けとるの でなかつたならば、

「十字架を信じる」

なんて言えない。キリストは十字架をもつて私たちをすっかり贖いとおつてくださった。これは恩寵です。私のようなダメな男がダメであるからこそ、十字架のこの恩寵を絶対恩寵というのです。あいかわらずダメでも、そんなことは問題としない。不完全な肉体ではありますが、空気を吸って私たちは生きてるように、十字架をもつて贖われたるこの現実、にこの生命が来るから、私たちはどんなにけがれていても、どんなにダメであっても、内側からどしどしきよめられてゆくのです。

●真の平和

1世紀から20世紀に至るところの常にキリストの恩寵の現実でありながら、なんとキリストの恩寵を、ユダヤ人をはじめ人類は拒んできたか。キリストは相変わらず十字架にかけられたままです。しかし、この十字架を受けとらないならば、神の怒りはこの人類に臨んでいます。どんなかたちで臨んでくるか知りません。人間はこれを拒むサタンの角度でもつて原子力戦争ということにならないと誰が保証できましょうか。事実たぐさんのごまかしが行われている。本当に平和というならば、口先だけの平和でなく、魂を神さまに向けてそそぎ、神さまによって碎かれなければダメです。私たちがこの神による本当の平和を受けないで、人間の間に平安も平和もこないのです。今の人たちが、ことに青年諸君がこの20世紀後半の危機にあたって魂の大改革をしなかつたならば、世界はまさに危険です。



●神の栄光体

二千年前に言が肉体となつて我らのうちに宿つたキリスト。そして、十字架より復活し、ペンテコステの日に御霊となつて降り給うたキリスト。このキリストを、即ち御霊のキリストを一人ひとりの魂の中に宿すことがクリスマスなのです。そうすれば、福音書が真に私たちの中に化体してきます。この土の器は恩恵と真理とに満ちてくる。単に二千年前に起きた事件だなんて思い出して言っているのではない。現実には御霊のキリストにおいてキリストが私たちの中に誕生し、新たに私たちが生まれるのでなければダメなのです。

皆さんは聞いて、私は語りました。けれども、本当に主イエス・キリストが、

「言が肉体となつて我らのうちに宿り給えり」

と、霊言が即ち私たちの中に化体してきて、私たち一人ひとりの血となり、肉となり、生命となり、また、キリストが我らの間に幕屋を張つて、キリストのエクレシヤとなつて、そのときに私たちは真に神の栄光を内から見るのです。

「^げ実に父の^{ひとりじ}独子の栄光にして、^{めぐみ}恩恵と^{まこと}真理とにて満てり」

と。キリストが即ち私たちの恩恵であり真理であるのです。

「汝らのうちにキリストの形成るまでは、我ふたたび産みの^{くるしみ}苦痛をなす」(ガ

ラテヤ4・19)

と、さきほど司会者が読まれた聖言の通りです。

そういうわけでありまして、皆さんと一緒にこのヨハネ福音書1章によつて、いかに見ることにも聞くこともできないところの神の言が、私たちにつらつら目にて見、耳にて聞き、手にて触ることのできるナザレのイエスとなつて現れ、一切の悩みも苦しみもけがれも、すっかりこれをよく同情、共感、洞察し、これを極みまでも愛しぬき、ついにおのれ自身の真の生命までも与えてくださったのです。これが、

「言が肉となつた」

消息です。この角度の救いがなかったならば、我々はどうにもならない。しかもそれは神の栄光の現れであつて、私たちが救われたというのは神さまの栄光がいよいよ私たちを通して現れたものであり、御利益でもなければ、観念でもないのです。ですから、私たちは全存在をもつてキリストの言となり、キリストの証言になりたいものです。アーメン、ハレルヤ！

（『愛泉』誌第26号、1959年12月20日発行より転載）

